

“あなた”を生み出す表現の力
～身体的共創から社会的共創へ②～

西洋子 (東洋英和女学院大学)・三輪敬之 (早稲田大学)

〈はじめに〉

発表者らはこれまで、共創的な身体表現において、自己と他者との同時的に生成する“身体の共振”に着目し、統計的手法を用いた共振の発現過程のモデル化や、身体計測システムを用いた創出ダイナミクスの検討、エピソード記述を対象とする共振の深化過程に関する質的検討を重ねてきた。特に深化については、連続する5つの mode を推定し、モーショキャプチャを用いた実験的試行から、各 mode の動作形態の違いを現象的に明らかにした。本研究では、こうした共振の深化の様相を、共創的な身体表現の実践現場での事例としてとらえることができたので、以下に報告する。

〈研究方法〉

① 対象とする実践現場

発表者らは、東日本大震災の被災地である宮城県内で、2012年4月より月に1回の割合で、子どもとその家族等を対象に、手合せ表現を主活動とする共創的な身体表現のワークショップ(以下WS)を行っている。本研究は、パイロットスタディ的なWSから、人々との協働を得て定例活動に発展した東松島市(2012.12～)および石巻市(2013.04～)での手合わせWSを対象とする。毎回のWSでは、年齢や性別、障害の有無等の異なる人々が、身体で表現を創り合い多様な交流を展開している。

② 事例抽出と検討のための資料

上記WSでの毎回の記録映像(ビデオカメラ2～4台)や活動記録、参加者のエピソード記述、保護者へのインタビュー等を検討資料とする。

〈結果および考察〉

図1は、手合せ表現での共振の深化のモデルとその動作形態を現象的にとらえたものである。本研究では、この深化の過程との関連で、以下の①～③の事例の抽出と考察を行う。

事例①：表現による出会いの契機(mode1-3)

抽出した事例は、東松島WSの参加者(以下pa)

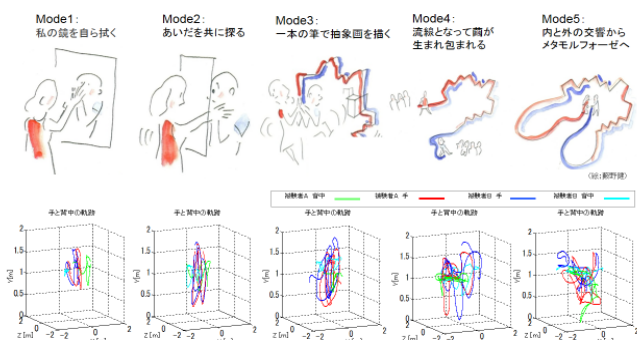


図1. 手合せ表現での共振の深化

T(発達障害・男子)とファシリテータ(以下fa)Nの1～6回までの手合せ表現ならびにWS終了時の感想を述べる場面での身体的かかわりである。第1回では、N(fa)はT(pa)との表現を築くことはできなかったが、回を追う毎にmode1からmode3への移行が映像や活動記録から確認された。また、表現の深化に伴って、感想場面でのN(fa)のT(pa)への身体的なかかわりが、半ば無意識的に変化していることが明らかとなった(表1)。

表1. 感想場面でのN(fa)のT(pa)へのかかわりの変容

回	期日	呼びかけ時	移動時	問いかけ時	応答時
1	2012.12.09	迎えに行く	腕をつかんで連れてくる	腕をつかんだまま	Tの前にて「せーの」の言葉かけで、片手で短いタッチ
2	2013.02.11	迎えに行く	腕をつかんで連れてくる	背中や肩に触れたまま	Tの前にて、両手で長いタッチ
3	2013.03.20	手を差し出しながら迎えに行く	その場で手をつなぐ	手をつないだまま	片手をつないだまま逆の手でタッチ
4	2013.04.28	少し離れた位置から手招きをする	手は後ろにだすが、触れることなくの少し前を歩く	横に並び、触れることなく問いかける	間を取り合ってタッチ
5	2013.06.09	前回より離れた位置から手招きをする	Tに先行して歩き、Tを待つ	横に並び、答える方向を示しながら問いかける	間を取り合ってタッチ
6	2013.07.14	かなり離れた場所から呼びかける	横並びの後、先行するTの後ろを歩く	横に並び	言葉を発しているような間合いで2度応答する

事例②：表現による共存在の生成(mode3-4)

抽出した事例は、東松島WSに参加する成人女性(障害のある子どもの母親たち)の集団での手合せ表現である。WSをはじめた頃(第1～3回)は、表現でのつながりを創り出すことが困難な様子が観察されたが、第8回のfaを含む10名による即興表現「花」では、共同表現から共創表現への深化を示すmode4が生成している可能性が、他の参加者の感想および、図2に示す時間経過に伴う表現空間内での位置の変化から推察された。

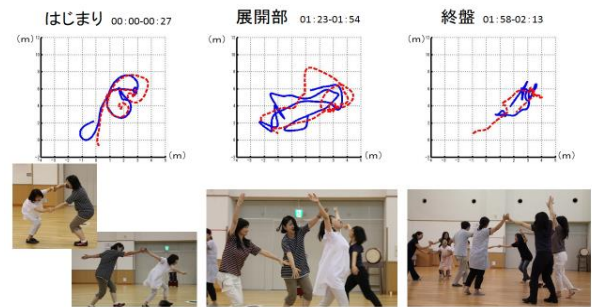


図2. 表現空間内での位置の変化:S(pa)とN(fa)

事例③：表現による開かれた交流(mode4-5)

抽出した事例は、第4回石巻WS(2013.08.23)での作品鑑賞場面である。この回は、東京で活動する「みんなのダンスフィールド」との交流WSであり、WSの終盤に行われた作品「ハーモニー」の鑑賞時に、それまでは主体的な表現が乏しかった発達障害児2名が、作品世界に即興的に加わり、そのことで、WS全体が生き生きとした表現の場に変容する様相をとらえることができた。

今回抽出した事例より、手合せ表現による共創的な身体表現は、自己と他者との水平方向のつながりと深化を促すことはもとより、自己が垂直方向に自己を深め、新たな自己として、他者としての“あなた”と出会うことへの気づきを生むはたらかのあることが示唆された。

「創造的身体表現遊び」における 自閉症スペクトラム児のコミュニケーション支援 —母子関係の変化に着目して—

大橋 さつき (和光大学)

【はじめに】

自閉症スペクトラム (以下, ASD と略す) の特徴とされる三つ組み障害 (「社会的相互交渉」「言語・非言語」コミュニケーション)「想像力」は、社会的相互交渉の障害、特に対人関係・仲間関係の形成という発達の課題として見られるようになり、ASD 児が自他の関係性について困難さを有することは広く認識されるようになってきている。また、このことが、養育者 (母親) との関係に影響を及ぼし、良好な愛着関係を築くことができずに悪循環に陥り二次障害につながることも指摘されている。一方、発表者は、これまでインクルーシブな場として、小林・Frostig による「ムーブメント教育」と身体表現活動とを基盤にした「創造的身体表現遊び」の実践を展開してきたが、ASD 児が集団遊びの中で共に動く喜びや表現する楽しさを体験する中で、他者とのかかわる力を伸ばし、同時に母親の幸福感が高まっていくことを実感してきた。よって、本研究は、「創造的身体表現遊び」における ASD 児のコミュニケーション支援のあり方について、特に母子関係に着目した分析を行い、その効果を明らかにすることを目的とする。

【方法】

発達障がい児を含む親子遊びの活動として実践した「創造的身体表現遊び」の記録をもとに、ASD 児 4 名 (開始時 5~7 歳、アスペルガー障害 1 名含) を対象に、「他者とのやりとり」が見られる場面について、「インリアル・アプローチ」を参照し映像分析を行った。分析対象は、対象児 4 名が継続的に参加した 2007 年 1 月から 2010 年 1 月までの 3 年間に実施した教室のうち、映像記録に不備がない回の計 24 回分である。トランスクリプトの作成にあたっては、対象児別に作成し、他者には、母親、支援者 (リーダー、ボランティア学生)、他児が含まれ、記号により整理し、分類した。第 1~8 回を I 期、9~16 回を II 期、17~24 回を III 期として分けて、行動数全体における、A: 相互作用不成立状態、B: 相互作用しかけの状態、C: 相互作用成立状態の比率を計算した。特に C の場面について詳しい分析を行った。

【結果と考察】

(1) 分析の結果、対象児と他者との相互作用が成立する確率が高まったことが明らかになった。さらに、反応率の比較においては、かかわる相手によってコミュニケーションの相互作用の成立に

差があること、活動の継続によって母親の反応率が上昇したことが明らかになった。

(2) C: 相互作用成立状態の場面の分析からは、①情動的交流・身体的共振、②模倣、③遊具の共有、④遊びの流れの共有、⑤要求・自己主張の 5 つの特徴が明らかとなった。

(3) 「創造的身体表現遊び」におけるコミュニケーション支援のあり方として、①包括的な遊びの場でコミュニケーションの「型」をなぞる、②かかわりながら、かかわることへの欲求を育む、③大人が遊ぶ主体としてかかわり続ける、の 3 点が提示された。

(4) 観察された母親の変化から、「創造的身体表現遊び」の体験が母親へ与える影響として、①子どもが遊ぶ姿から子どもの特徴や発達について気づきをつかむ、②他者と子どもの関係から親が子にかかわるための手がかりを得る、③親自身が遊び体験を共有することを通して自身の気持ち子ども重なり、子どもの気持ちや表現の理解が深まる、といった効果が考察された。母親が子どもを肯定的に承認する経験が増えゆとりを持って子どもの気持ちに沿った対応が可能になり、母子で一緒に全身を投げ共通の体験を積むことが母子間のコミュニケーションの活性化や互いの理解につながり、母子関係の変容を促したと考えられる。

【まとめ】

従来、ASD 児のコミュニケーション支援としては、障害による「個人の能力」の不足を訓練的なやり方で補い改善する方法や「特異」と見なされる行動を直接的に取り除くための対症療法的な方法で、「伝達」するためのスキル獲得を目指したアプローチに力点が置かれてきた。しかしながら、コミュニケーションの本来の意味は、「共有し合う」こと、「通じ合う」ことであり、「関係性」から切り離れたところでコミュニケーションの力は育たない。身体で通じ合う体験を通して、何より「かかわりたい」という欲求を育むことが重要である。そのためには、対象児のコミュニケーションスキルの向上だけに焦点を当てるのではなく、母子関係を中心に多様な関係性を支えることが必要であり、「創造的身体表現遊び」の場は、それを可能にすると言えるだろう。

【文献】

フロスティグ, M 著. 小林芳文訳 (2007)「フロスティグのムーブメント教育・療法」, 日本文化科学社。

竹田契一監修, 里美恵子・河内清美・岩井喜代香 (2005)「実践インリアル・アプローチ事例集—豊かなコミュニケーションのために」, 日本文化科学社。

<付記> 本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究 B (課題番号 23730868) の助成を受けた。

身体表現を通じた被災地とのかかわりを考える —関東からの参加者に焦点をあてて

弓削田綾乃・野口晴子・三輪敬之（早稲田大学）
西 洋子（東洋英和女学院大学）

1. 研究目的

東日本大震災から2年半が経過し、その間、多くの人々が被災地を訪れ、多種多様な活動を展開している。発表者らが2012年から月に1回の割合で実施している、宮城県内での共創的な身体表現ワークショップ（以下WS）もその一つであり、宮城県内外の人々が、被災地という現場で実施されるWSで出会い、共に身体での表現活動を行っている。このWSに関東から参加する人々にとって、被災地やそこで生活する人々と身体表現を通じてかかわる体験は、どのような意味をもつのであろうか。本研究は、WSの初期段階での関東からの参加者を対象に、被災地訪問やWSでの意識とその変容、実際の身体表現等にあらわれる変化等を検討することで、今後の継続的な実践研究のための基礎的知見を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象とするWS

【石巻市でのWS】参加者は、児童福祉サービスセンターを利用する発達障害のある子ども（10～12名）と保育者および関東からの参加者らである。

【東松島市でのWS】年齢・性別・国籍、被災・障がい・ダンス経験の有無などが異なる多様な人々によるインクルーシブなWSである。

両WSは、手合せ表現を主活動とし、身体表現を専門とするファシリテータが全体を進行する。



写真1. 表現WSの様子

(2) 対象者

2012年12月～2013年8月の間に東松島市（7回）と石巻市（4回）で実施した身体表現WSの関東からの参加者49名のうち、感想等の記述で協力の得られた22名を対象とする。参加回数は、1回:10名、2回:5名、3回:4名、4回:3名である。

(3) 感想と映像記録の収集

上記参加者から、被災地見学およびWSに関する感想を自由記述により収集した。また、毎回のWSの様子は、会場に設置した2-4台のビデオカメラで撮影し映像記録とした。

(4) 分析方法

①収集した感想は、KJ法分析を参考に、一文を基本単位としたラベルを作成し、質的内容を検討した。2013年9月12日に舞踊学研究者3名でカ

テゴリーの抽出と確認を行った。

②インタビューは、自由記述の感想を得ていない参加者を中心に、半構造化面接を実施した。

③収集した映像記録は、①②で特徴的な変化のみられた2名に焦点をあて、身体表現を検討した。

3. 結果と考察

(1) KJ法分析と抽出カテゴリー

22名の感想から計427ラベルが作成された。これら全ての質的内容を検討し、次のカテゴリーを抽出した（写真2）。

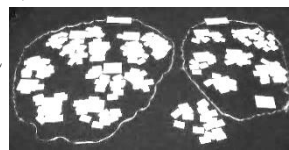


写真2. カテゴリーの抽出

【被災地見学（89）】「風景」「訪問前」「自己（悲・恐）」「自己（前進）」「他者」「未来（わたし）」「未来（わたしたち）」【WS（255）】「自己」「他者」「共創表現の場」「未来（わたし）」「未来（わたしたち）」「運営」「会場」【その他（83）】

(2) 被災地訪問の感想と意識の変容

初めて被災地を訪問した参加者の記述として、「風景」と「自己（悲・恐）」の割合が大きかった。しかしこれらは2回目と4回目に減少し、かわりに「自己（前進）」に関する記述が、全体の約3分の1を占めるまでに増えた。また、「他者」「未来（わたし）」に関する記述は、3・4回目に増加傾向にあった。インタビューでも、初めての訪問については「重い空気」「怒り」等の否定的な言葉が多用されていたのに対し、その後の訪問には「希望」「前進」「心が軽く」等の肯定的な言葉が使われるようになっており、意識の変容が認められた。

(3) WSの感想と意識の変容

「自己」に関する記述が3・4回目に減少するのに対し、「他者」に関する記述は徐々に増加する傾向がみられた。「他者」の記述内容をみると、自分以外の人の表現や、人と人とのつながりなどへの気づきが、具体性をもって記されているものが多い。それと連動するように、「表現すると誰かが応える」「一緒に何かを創り出す感覚」「一体感」などの言葉であらわされる“共創表現の場”に関する記述が増加傾向にあるのも特徴的であった。

このような「自己」から「他者」へと広がる変容の過程は、WSでの身体表現にも認められた。対象者Aは、初回は座って見ている時間が長かったのに対し、2回目は人と主体的に関わろうと動き続ける姿がみられた。また、対象者Bは、初回は表現の場の周縁を移動しつつ手合せを試みようとしていたのに対し、3回目には表現の場の内側で自由に動き回りながら、多様な人たちと笑顔で手合せする姿がみられた。A・Bに認められた変化は、身体表現を通じて多様な人と深くつながろうとする意識変容のあらわれだと推察する。

*科学研究費基盤研究B（H25～27年度：25282187）「創造的な身体表現活動での共振創出に関する研究」（代表：西洋子）

カロリン・カールソン振付『密度 21,5』
にみる身体

舞踊学会会員 壽田 裕子

【研究目的】

本研究では、1970年代フランスにおいてコンテンポラリーダンスの諸問題を提起したアメリカ人舞踊家カロリン・カールソン（Carolyn Carlson 1943-）に着目する。当時パリ・オペラ座とモーリス・ベジャール率いるベルギー国立二十世紀バレエ団が展開するネオ・クラシックが優勢を占めたフランスの舞踊界で、カールソンの身体がどのように受入れられたかを検討することが本研究の目的である。そのために、1973年5月24日パリ・オペラ座で開催された企画「エドガー・ヴァレーズへのオマージュ」で上演されたソロ作品『密度 21,5 (Densité 21,5)』を中心にカールソンの身体を考察する。研究方法は、新聞・雑誌の批評文および関連書籍、映像を用いる。

【結果および考察】

1936年ヴァレーズが作曲したフルートのためのソロ『密度 21,5』は4分30秒から成り、カールソンは前半に4分間の無音を加えて8分30秒の作品に仕上げた。

作品の全体像は音楽から湧き出る内的イメージとジェスチャーによる抽象的な着想が窺える。コンテキストを反映するような一貫した展開は見られない。衣装はベルナルド・ダイデがデザインし、ユニタードの右半身に布を纏っており主体性を欠いたキツク囲気な雰囲気を醸している。

ムーブメントの展開は、全体として流動性を帯び曖昧であるが、繊細な感覚を伴って不均一さと軽快さを兼ね備える。ムーブメントは微かな輪郭を見せるが次に展開することはなく、時空間においてのみ連鎖する。

時にダンサーのムーブメントは、回転やアラベスクのようなバレエの優美なフィギュアを表すが、彼女の行為は観客のシンパシーを得ることなく瞬く間に崩れる。そこで結ばれるダンスと音楽の関係は従属することはなく、互いに自律している。

ジェスチャーは手先から微細に流動させる、ぎくしゃくさせる、ロボットのように肘を曲げて腕を動かす、手首を少しずつ回しながら腕を広げるといった様々な趣をみせ微光を放つ。時折、ほっそりとした身体から表現される腕の伸張と湾曲は身体訓練が行き届いたしなやかさを見せる。これらのジェスチャーにはバレエ・テクニクに定められた規範は存在せず、フィギュアが一貫

性を見せることはない。

空間移動においてステップは不規則で多様に表現される。叙情的で流麗なパ・ド・ブレやジャンプを行いバレエにおける上昇を表象する一方、冒頭部で見られる両手と両足の爪先を床に押し立て立ち上がろうとするおぼつかない様子、バレエの第四ポジションで立ち位置を確かめるように前後に重心を移動し、慎重にバランスをとる様子は相反したイメージを見せる。

バレエのイメージを織り込みながらもカールソンの身体は、バレエの身体を逸脱していることが判る。彼女の身体は人物描写や文学的、音楽的動機付けを拒否し、身体の行為やムーブメントの特性を活気づけるための探求をしたアルヴィン・ニコライの概念に基づく。彼女の骨盤は定位されず、脊柱のラインはウエストから上下にまっすぐに引き伸ばされており固定されることはない。カールソンの身体は容易に姿勢を変え、胸像を彫るかのように上半身は屈曲し、波打ち、また身体を吊したような操り人形を連想させるフィギュアを表し、筋肉の緊張が緩和された状態を可能にする。このことは「生命においてムーブメントの重心が一点ではない状態にある」¹といえ、即ちニコライが遂行した「非集中化」の現れと言える。

当時まだバレエ中心の文化だったフランスでは、ベジャールを筆頭にバレエとモダンダンスをはじめとする別の表現形態を折衷し、バレエの身体の多様性を呈示していた。アメリカで一般化されたモダンダンスは制度的には受入れられていなかった。こうした状況の中で、カールソンの身体はパリ・オペラ座における身体の歴史を根本的に揺るがすことになる。上半身を反らせて顔を手で軽く触れるとカールソンの身体が揺れる。曖昧ながらもラストシーンは、このバレエの殿堂に師ニコライが継承し進化させたダンスにおける近代性の立役者たち-ラバンやヴィグマンらが探求した「無窮の可動性」²を確かに印したと言えよう。

¹Hubert Godard, « Le geste et sa perception », in Isabelle Ginot et Marcelle Michel, *La danse au XXe siècle*, Borda, Paris, 1995, P.225

²Elisabeth Schwartz, « Les partenaires du solo », *La danse en solo - Une figure singulière de la modernité*, Centre National de la danse, Pantin, 2002, P.33

舞踊における身体の組織化と表現の生成

大阪大学大学院
竹谷 美佐子

目的

舞踊者の日常的な訓練による身体の組織化は、既得され習慣化された身体運動体系の更新という自己言及性と、表現としての他者との間身体的な共有可能性を帯びる。この構造について舞踊者の稽古体験の語りを素材に、メルロ＝ポンティの思想を手がかりとして現象学的記述を試みる

はじめに

舞踊者は、長期におよぶ訓練によって身体を組織化する。舞踊者は稽古でのストレッチや振付などの一連の運動がどのように展開されるのかを身体感覚に依拠して確かめる。稽古とは自らを運動主体でもあれば運動を感覚する主体とする動的な現象の在り方を問う試みと言える。稽古では、舞踊者は、すでに獲得された習慣としての身体運動をもとに、投企によって与えられた稽古の場という状況を設定しなおし、そうした状況において運動遂行を支える前人称的な身体図式を活性化させていく。舞踊者は、運動遂行をつうじた身体の組織化の過程を、運動をあるがままのものであれば、その顕在性を超えて身体感覚として知覚する。こうした舞踊者の試みは、舞踊者個々人の身体において展開されている点で自己言及的である。同時に、こうした過程をへて身体を組織化していくことが、表現として舞踊する身体の経験を、舞踊を見るものと共有しうる。本発表では、自己言及的な身体の組織化の試みが、どのように表現として展開されるのかについて、その構造を記述する。

研究の手続き

コンテンポラリーダンスの舞踊家・指導者 Cさんに舞踊の稽古体験について200X年Y月、非構造化インタビューを実施した。インタビューでの語りをもとに、メルロ＝ポンティを援用し、舞踊の稽古における身体の組織化と表現としての運動生成について記述する。

1. 見せる身体としての組織化

Cさんは、稽古での課題を「人前に出す身体を作ること」であり、そのために「スキルが見えること」と語る。稽古の場では、舞踊者は自らを動的な現象として身体感覚に依拠して探究していく。メルロ＝ポンティによれば、われわれは運動を知覚する際、動体とともに、運動を支える背景をな

す前述定的な作動を知覚する。この意味で、舞踊の「スキルが見える」とは、舞踊者が意志によって身体部位を操作し、技法の外的形態のみを展開させることではない。また、舞踊者が意図的に感情を設定して、その身振りを再現することでもない。スキルとは、むしろ技法の遂行を支える前人称的な身体図式が活性化されていることである。意志による身体の部位操作のみではなく、運動を支える前人称的な作動を含みこんで、与えられた状況に展開されるとき「表情がでる」とCさんは語る。このときにすでにいまだ現前されてはいないが、他者の視線を想定している。稽古による技法の獲得とは、過去に獲得された習慣の上に投企によって、稽古の場を設定しなおし、設定しなおされた状況において身体図式を再構成していく「捉え直し」の体系を獲得することである。

2. 見るものと共に舞踊を経験すること

1節で記述したような、過去に獲得された習慣を、与えられた状況に「捉え直し」として展開する。このことで「見てる人が、自分の過去の記憶のここらへんにあたってしまうみたいところが平たく言えば狙い」とCさんは語る。メルロ＝ポンティは、意志や思考として意識化される以前に身体的な次元での前述定的な世界への働きかけを沈殿と呼ぶ。舞踊者は、与えられた状況において運動を支える前述定的な作動を巻き込んで展開していく。舞踊を見るものは舞踊を見るという行為をつうじて、身体に沈殿する前述定的な作動を、見るという状況において再構成していく。舞踊者と舞踊を見るものは、状況において物理的に並置された対象として互を認識するのではなく、舞踊という動的な現象をともに経験し知覚する。

3. 結語

舞踊者は、運動を展開するが、それは身体の形態変化よりも、運動を支える前人称的な作動を巻き込んだ状況への働きかけそのものが主題的に扱う。そうした働きかけこそが、舞踊を見るものと共に舞踊経験を支える。稽古における身体の組織化は、舞踊者の身体によって引き起こされる動的な現象によるものである。同時に、舞踊する身体は、表現として、舞踊を見るものの身体が展開する動的な現象を含みあいながら組織化されていく。

ダンスインプロヴィゼーションにおける 動きの生成過程について

○重松悠希（お茶の水女子大学大学院）
猪崎弥生（お茶の水女子大学）

【研究背景】

本研究ではダンスにおいて1人以上でその場の状況、音、相手の動きなどから刺激を受けるなどして即興的に動きを生み出していくことを「ダンスインプロヴィゼーション」とする。また、コンタクト・インプロヴィゼーション（以下 CI）に関してはダンスインプロヴィゼーションの一手法として位置づけることとする。

筆者は大学に入り即興というダンスの手法に出会った。「自由に、自分の気持ちの赴くままに踊っていい」と言われ、はじめは戸惑ったが、だんだんとその魅力に気づいていった。即興は面白い、やっていて楽しい、と感じるとともにだんだんとダンスにおける即興とは何なのだろうという興味も湧いてきた。特別なテクニックを必要とせず自分の動きで自分の思うままに表現を行う「即興」という手法を、創作法のひとつとして、またパフォーマンスの一手法として多くのダンサーが取り入れている。しかし、「即興」という手法についての舞踊的見地からの研究は音楽や演劇の分野に比べると少ない状況にある。筆者は卒業論文において「ダンスインプロヴィゼーションによる身体的・精神的変容について」と題し即興的ダンスにおける身体と精神の関係について研究を行った。これを受けて、筆者は更にダンスインプロヴィゼーションに関する研究を進めるため、今回はダンスインプロヴィゼーションを行っているときダンサーはどのようにして動きを生み出しているのかに関する研究に着手することとした。

【研究目的】

ダンスインプロヴィゼーションにおいて動きが生成される過程の構造化を目的とする。

【研究方法】

2011年3月8日～11日にお茶の水女子大学舞踊教育学コースにおいて行われた「舞踊表現技法実習(中級)」の授業の受講者を対象に半構造的面接法によるインタビュー調査を行い、その内容を修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ (M-GTA) で分析を行うことによってダンスインプロヴィゼーションにおける動きの生成プロセスの構造化を試みる。

なお、本授業の講師は日本における CI の第一人者である勝部ちこ氏である。ただし今回の授業内容は CI に関してではなく、ダンス経験者である受講者が即興の可能性に気づくこと、即興的に踊ることに対して学生を慣れさせることを目的とし（講師へのインタビューより）、1日約6時間×4日間で構成された授業である。ただし、最終日の3月11日は東日本大震災のため全てのメニュー

を消化できてはいない。

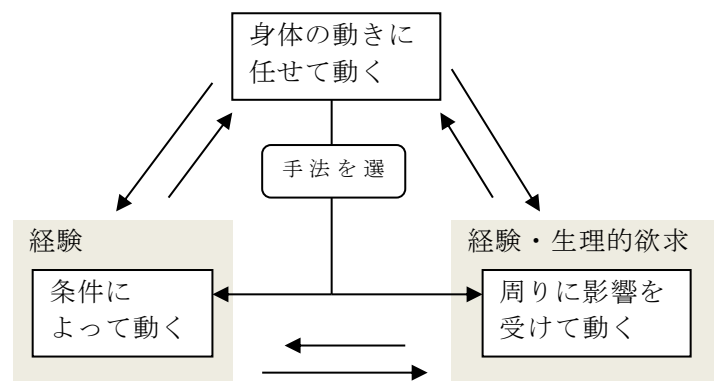
【結果と考察】

受講者へのインタビュー調査の内容を M-GTA で分析した。

M-GTA の手法は、以下の流れで行われる。

- ①インタビュー調査の文字おこしデータから意味の流れを重視しつつキーワードを拾うことで概念化を行う。
- ②概念のまとまりごとにテキストを構造化しカテゴリ化する。
- ③抽出された概念やカテゴリの関係を捉えて暫定的な全体像やモデルを素描して理論化を行う。

結果、ダンスインプロヴィゼーションにおける動きの生成は下図のようなプロセスを経て行われることが明らかとなった。



ダンスインプロヴィゼーションの行われる環境（音楽の有無や人数など）にもよるが、多くの学生は「即興」を行うときにはまず[身体の赴くままに動いてみる]。その中で徐々に[自分の中で条件を設定することによって動きを生み出す]ことや、[周囲の環境に影響を受けて動きを生み出す]ことをとり入れつつ動きの流れを生成していく。条件の設定の仕方は授業内容などで蓄え、それらの経験の記憶などから選択している。周囲からの影響は直接的な接触のみではなく同じ動きを真似てみたりきっかけを周囲から得ることなども含まれ、これを行うのは経験によるものもあるが多くの場合は思わず一緒に動いてしまった、など生理的な欲求によるものである。

一連のダンスインプロヴィゼーションの中では①身体の動きに任せる②条件を設定する③周囲に影響を受ける という3つの動きの生成手法を軸として、最初に①から始まった動きを徐々に②③も織り交ぜつつ手法を循環させながら動きを生成していると考えられる。

【参考文献】

木下康仁「ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法」(弘文堂) 2013

重松悠希「ダンスインプロヴィゼーションによる身体的・精神的変容について」(お茶の水女子大学卒業論文) 2012

運動感覚における強度と調整
—動作のダイナミズムを形づくるもの—

柿沼美穂（国立環境研究所）

舞踊という芸術が人間を魅了するのは何によるのか。舞踊は、先史時代の遺跡にまでその起源を確認でき、舞踊に類似した動作をもたない民族はほとんどないといわれるほど世界中に広く普及した芸術形態である。しかし「舞踊とは何か」という問いに関しては、ランガーが指摘したように「混乱」状況が続いている。それは、舞踊に客観化の困難な運動感覚が関係するからだと考えられる。

舞踊は空間芸術であると同時に時間芸術でもあり、人間の視覚と聴覚の双方に働きかける。しかし、最も特徴的なのは、舞踊を行う者のみならず見る者の深部感覚、あるいは体性感覚としての運動感覚に大きな影響を与える点であろう。それは、われわれが今ここに存在し、自らの身体を動かしていることを感じ取る感覚であり、また周囲からの刺激に対応しつつ、自らの基本的な姿勢や動きを調整する、身体のもっとも基本的な感覚の一つである。具体的には筋肉の抵抗感や力、方向性、スピードといったものが要素として挙げられる。

この運動感覚は、何よりもまず自分自身の動きにおいて生じ、感じ取られるものと考えられる。しかし、実際には、他者の動きに対してもそのような感覚を得ることが可能である。われわれが他人の動きを見るとき、その人の力の入り方や抵抗の大きさ、時にはその動きへの熟練度まで、程度の差はあれ、感じ取ることができる。舞踊は、こうした人間の動きを主要な要素とする芸術である。とすれば、このような運動感覚をあらためて捉えなおす必要があるのではないだろうか。

運動感覚は、視覚や聴覚に代表される五感のような感覚とはやや異なる性質を有する。それは、視覚や聴覚のような認識能力とは異なり、人間の行動や行為を調整する働きが重要となる能力である。そのためこれを対象化して見つめなおし、記述することは、視覚や聴覚のような感覚に比べて難しい。たとえば自転車に乗れるようになるには、身体各部のバランスや力の配分を「認識」と同時に、そのバランスや力、スピードなどをうまく「調整」し、何らかの規則性の下にまとめあげなければならない。われわれは、この運動感覚の働きをある程度まで自覚できる。しかしそれは、視覚や聴覚に比べて、非常に漠然とした自覚でしかない。これは、運動感覚が、視覚や聴覚とは異なり、調整能力としての働きに主眼が置かれるからにはかならない。しかも、この調整能力には、

いったん、その運動の獲得に成功するとそれを習慣化し、無意識化する強い傾向性があるのである。

しかし、そうした運動感覚のなかでも、筋肉が感ずる力や勢い、抵抗感といった、いわばダイナミックな力動感の変化を感じ取ることは比較的容易である。このような力動感の変化は、人間の動きにおける「原志向的位相」→「探索位相」→「偶発位相」（金子明友『わざの伝承』p. 417-425、2002年、明和出版）のような、予期と探索、試行錯誤という一連の時間的な経過に沿って現れる。

つまり、この主観的で運動感覚は、力動感が生み出すリズムを伴いつつ、自ずと作り出される規則の下に「ひとまとまり」の運動の連なりによって構成される独自の時間を生み出すと言える。さらにそれは、運動感覚が状況に対応して調整する能力であるがゆえに、変化や発展の可能性を有している。すなわちそれは、一定の長さのある分割し得ない何らかのまとまりを基体としてもち、それが力動感のリズムなどを基盤とした何らかの規則性を獲得しながら続いていくような時間である。しかも、状況の変化に応じて変化や発展をしながら続いていくのである。

発表者は、今回の発表において、人間の主観的な時間には、カントやフッサール等が提唱した時間のほかに、このような運動感覚によって感じ取られる時間があることを提起したい。カントは、内官の形式としての時間秩序によって、諸知覚が時間軸に沿って分節化し、秩序ある現象として把握されうるとした。ベルクソンは、空間的認識として分割できない「持続」である意識流が時間の基盤となると考え、そのダイナミズムに注目した。フッサールの提起した、意識の把持が基盤となる、過去—現在—未来と名付けられる時間は、この運動感覚が生み出す時間に似ているところがある。しかし、それらは、いずれも認識における時間であり、動きの形成あるいは産出という実践的場面におけるものではないという点で異なっている。

このような運動感覚を基盤とする時間の感覚は、筋肉が感じ取る力や勢いの「強度」の変化を通じてであり、これが動作のダイナミズムの基盤となる。われわれは運動感覚の調整能力を通じてこのダイナミズムを規則化し、一連の動きを作り出す。舞踊は、こうしたダイナミズムの規則性を非常に重要な要素として有している。とすれば舞踊は、このような人間の行動における基本的な時間性をわれわれに思い起こさせ、あるいは獲得するために、非常に有用なのではないか、と考えられるのである。さらに、メルロ＝ポンティが述べるように、人間の運動がその知覚を裏打ちするとすれば、このような時間性を獲得することは、人間の運動ばかりでなく、知覚の可能性を拡張し、世界との関係を深めることにつながることもなるのである。